

Festandes(1921), Die Geographie ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden(1927) 等其著書甚だ多い殊に地理方法論に於ては頭角をあらはして居る。將に七十に垂んとして居るが頗る健全に見受けられ、一九一三年、當大學の Smithemiet 氏と共に本邦に來らた當時を追懷せられ、京都大學の丑田氏(當時京大地理教室の助手た

りき)の案内で日本アルプスを踏査、東京で山崎博士に會し、日光横濱・箱根等を視察し、再京都・奈良を經神戸から乗船支那に渡つた云々と話して居られた。最後に山崎、小川諸氏に宜しく傳へてくれとの御傳言でありました。日本アルプスの一名勝ヘットナー石のことども思ひ浮べて愉快であつた。

西遊夢錄

(十五)

瀧川規一

蘇國の部

(XVI) ジョン・ノックスの家と彼の生涯 (一)

ホルード宮とメリ女皇との連想を辿りつゝ旅足は間近にあるジョン・ノックス(John Knox)の家に向ふ。宮殿正門から次第上りに傾斜せるハイ・ストリート(High Street)を行くと左側に出張つた古風な家がある、道路から直接に幅廣からぬ階段を登つて戸を叩けば所謂ノックスの家なるものに請じ入れらる。斯うした處には何處にもあるが如く往訪簿に署

名をさされる。やがて狭い薄暗い部屋に案内され或はノックスの書齋或は會合室なるもの或は寢室などと順次に説明よろしくあつて遂に階下にある諸種の土産物や記念品の賣店に入る。宗教的運動の主唱者たるノックスを象徴する家としては誠に相應はしい陰鬱な家である。

一九〇五年にはノックスの誕生四百年祭が盛に行はれた。

獨乙にはマルチン・ルーテル(Martin Luther)が居り、瑞西にはジョン・カルヴィン(John Calvin)が居り夫々宗教改革の運動を起した。獨乙國民の大半が新教徒(Protestant)となつた

のは今更云ふまでもなくルーテルの影響であり、蘇國民が新教國民となつたのはノツクスの影響である。ノツクスの名は今日蘇國に於ては男女老弱を問はず三歳の兒童と雖も知らぬものが無い程である。

名聲の後世に噴々たるに抱らず不出世の偉人に往々あるが如くノツクスも亦其生年月と誕生の場處とが判らない。然し通俗にはノツクスの誕生の年は一五〇五年と云ふことになつて居り、誕生の場所ば、エヤンバラ市の東二十哩許の Haddington の町若くはその附近であつたと信じられて居る。ノツクスの父及び二人の祖父がボスウェル (Bothwell) 伯の一門に仕へその軍旗の下に戦つた。ノツクスの母親については世に傳はるところ尠く只其名がシンクレア (Sinclear) であつたと云ふ丈けしか傳つて居ない。何れにしても身卑賤より起り一國を左右する偉人の一條件がこの點に於てノツクスに備つてゐる。ルーテルの場合もさうであつた。鐵夫の子であつたルーテルも云つた。「吾は百姓の子である。祖父も祖先も悉く實際に百姓であつた」。

抑もハツチングトンの町は其郊外と共に感じのよい美しい處である。遠く二方に海を眺め他の二方には起伏せる丘陵を望んで周圍一帶の地は地味肥沃であつて夏時には果樹の綠園を隨處に見ると云つたやうな土地である。町そのものは小さな田舎町であつて人口一萬から二萬までの處である。こんな小さな町にしては寺院の数が多過ぎる程ある。今日では全く廢墟になつてゐるが二つの僧院 (Monasteries) と一つの尼院

(Abbey) とがあり三つの教會と三つの禮拜堂とがある。蘇國としては多くの名士が教育された點で有名となつて居る學校がある。

序ながら當時の學校の様子を述べて見たい。英蘭のウォリックシヤ (Warwickshire) のストラット・フォード・アボン・エッオン (Stratford-Upon-Avon) にあるにシエクスピア (Shakespeare) の通つた學校だと通俗に傳じられて居るものを見ると、椅子机はあるが實に物暗いお粗末な家である。日本の寺小屋なるものとは大した差はない。今ノツクスの通つたと稱せらるゝ學校も亦これに似てゐるがより以上にお粗末である。小供が一室に集められて床の上に坐る。机椅子があつたのではない。壁には窓がなく只船室の明り窓の如く圓い孔が開いて居る丈けである。好天氣の時にはこれを開ける。寒い時や雨天にはこれを布切れで塞ぐ。小供等は夏冬共に朝早くから學校に行く。自然室内は暗くて讀書が出来ない。學生は各自に小さいランプを持參して書を讀む。只先生丈けが椅子に腰を掛け書机を前にし机の上には鞭を備へて居る。鞭で小供のお臀をよく叩くことが名詮自稱の鞭鞭の師である。鞭鞭することを叩へれば小供を駄々兒にするとの諺は其處から起る。

鞭鞭することをもつて家庭の美風と心得た時代があつた。位置の高い家では客人を請じ、晚餐の後に客人等の前に小供を連れ來りこれを鞭打した。小供こそよい迷惑である。もつて家庭の嫌のよいことを示したのである。今日から考へると

作り事のやうであるが四百年以前の蘇國の學校及び家庭教育はさうであつたらしい。校庭を過ぎる人は孟牛を囀る雀の聲を聞くのではなくて鞭打されて泣く小供の叫び聲を聞いた。さうして憤激の教師の聲がこれに加つた。先にはホルルド宮に於けるノツクスの説教を想ひ今ノツクスの家を訪れて、念頭には彼の時代の殺伐なる人心とノツクスの執拗さとが固騰して離れない。この執拗さと殺伐とが何處に萌ざしてあるかを考へて見る時彼の時代にあつた名詮自稱の鞭撻が幾分の因をなして時代相をあらはしてあると想起せざるを得ないのである。學校で教へらるゝものは祈禱書である。祈禱書と云ふも今日教會にて教へられる宗門問答書(Catechism)の如きものである。次に拉典語入門であり、ドナト(Donat)の著した二十頁ばかりの拉典文法である。當時公私の文書が悉く拉典文であつたから拉典語は幼時より必須のものであつた。斯くして拉典語の初歩を知り得た小供は巴里羅馬及びウィッテンベルグ(Wittenberg)の學校へ送られた。當時拉典語さへ知つて居れば、何處へ行つてもそれで通話が出来た。高級の學生には拉典語で教師は話した。休憩時間内でも學生は拉典語で遊戲をなした。母語を喋つて居るのを教師に發見する時は罰せられたと云ふ有様であつた。ノツクスの通つて居たハツチングトンの學校では拉典語以外に佛蘭西語をも併せて教へて居た。良家の子弟の多くが佛蘭西見物に行つたり佛國の諸大學に遊學したから其要求に應じたのである。ノツクスはこんな教育を受けたので自然拉典語を知つて居り、

佛語にも堪能であつた。佛語に秀でてゐた。後に佛語で佛人に説教をなした程に堪能であつた。

ノツクスは學業が優れてゐたので大學に送られたと云ふ。當時蘇國には三大學があつた。一つはセイント・アンズリユズ(St. Andrews)の大學一つはグラスゴウ(Glasgow)の大學一つはアバチーンの大學であつた。その何れにノツクスが入學したかは確でない。然し當時の碩學であつて僧侶階級の怠慢弛廢の状態を叱つたジョン・メイア(John Main)の影響をノツクスが充分受けたらしく、後年宗教改革の爲め熱辯を振つたのはその感化であつたと云はれて居る。

ノツクスが大學を去つたと思はれる年からの數年間は全く消息不明である。彼が三十五歳に達した時自らサア(Sir)の稱號を附けて Sir John Knox と稱してゐた。羅馬教の僧侶となり此處彼處の寺院禮拜所で説教などをなして日を送り傍ら公證人(Notary)をなしてゐた。公證なるものはその業務の性質今日も昔も變りなく證書類遺言狀類の作成に當るものである。従つて誠實にして教育あり拉典文を能くしなければならぬ。ノツクスは僧侶であり且つ公證人であり。加之に、故郷にて近隣の小供を教へて生活の資となしてゐた。

これまではノツクスの生活が他の人々の生活と何等異なる處がない。然るに此處に彼の生涯の一大轉換を作つた人物があられた。それはジョージ・ウィッシヤット(George Wishart)と云ふ説教師が歐洲から渡來して獨逸英蘭その他の諸國に既に行はれてゐた宗教改革の教儀を東ロシアン州(East Loth-

ian)即ちノツクスの生地で説き始めたことであつた。當時カーナル・バートン(Cardinal Barton)と云ふ大僧正があつて蘇國に於て羅馬教の教に違背した教儀を教ふる者を悉く火刑に處することをもつて自己の義務であると信じた。然るにウィツシャトは身の危険を冒して新しき教を説く爲めに來たのである。ノツクスも彼の教に耳を傾けた。ウィツシャトが説き廻る際には身邊に常に帶刀の護衛者があつた。ノツクスはその護衛者たらんことを申し出たが、ウィツシャトは一個の犠牲には一人にて足れりと云つて辭退した。遂に彼は襲はれてセイント・アンズリユズに拉し去られ遂にビートンの爲めに火刑に處せられた。

ノツクスはこの殉教者の教を受け継ぎ全力をそめて新教を説いた。當時改革論者の主張は第一に蘇國にて教へられて居る舊教が國民に害をこそすれ何等益を與へずと云ふことと第二にその教は聖書の教に非らずと云ふことであつた。改革論者は宗教界の墮落を指摘した。當時の僧侶と云ふ僧侶は大僧正、僧正、牧師、修業僧を問はず共に其なす可き義務を怠つて居た。彼等は何れも怠慢であり無智であり時には破戒の墮落僧もあつた。僧侶は身自ら富んで居つて貧民を省みなかつた。成程ノツクス等は實際の事情よりも大袈裟に吹聴したかも知れないが。然し全く根據がないのではなかつた。改革論者等は種々の點に於て意見の一致を見なかつたが、只一つの點に於て彼等の見解が一致した。彼等の説く處は斯うである。信仰は各自の良心の問題であつて、人と神との間に第三

者が介在してはならぬ。その間に介在する僧侶聖徒或は偶像は只信する者を迷路に導くだけである。神との直接の交通こそ聖書の教ふる處であると彼等は説いた。斯くて自己の意志と神の意志とが一致することに意義があると考へたノツクスは其結論として羅馬教の倒壊を期し聖書の眞の宗教を教ふる新教會の建設を主張した。

暴は暴によつて酬ひられることは世に有勝ちなことである。ウィツシャトを殺した二ヶ月後にはビートン大僧正その人が刺客の爲に儘された。ノツクスの身も危くなつた。一方セイント・アンズリユズの城ではビートンを殺した連中が國法に叛いて城に立ち籠つた。ノツクスが身の危険を免る可き唯一の場所はこの城以外にはなくなつた。ノツクスは彼等がなす可きことをなしたのであると考へたので彼等の間に身を投じた。實に當時は物騒な世の中である。國王も僧正も政治家も何れも自己の政策に邪魔立てをなす者を殺すことが反對者を除く唯一の方法であると考へた。三百年以前の蘇國には今日極東の隣邦で見ることが如く生命財産の保障はなかつた。

セイント・アンズリユズの城は叛徒として當時の攝政君主によつて包圍されたが、容易に陥落しなかつた。佛蘭西からの援軍を得て漸く降伏せしめたのであつた。この時降伏者は佛國若くはその他の諸國に追放された。ノツクスは佛國を撰んだが爲めに佛國の異端者取締の法律に照されギヤリ船の奴隸として船櫓を漕ぐ身となつて二千年を送つた。ギヤリ船の奴隸の苦役が如何に残酷なものであるかは今日活動寫眞によつ

て人の知る處である。小規模にては今日競漕の爲めに練習せる學生のバック臺の有様そのまゝである。奴隸の身に纏へる衣服は粗い帆布にて作られ、肌膚にはセル地のシャツを着け頭を坊主刈にして小さい帽子を冠つて居た。四人若くは六人宛一つの鎖に繋がれて坐席に結びつけられ晝間は只漕ぎ続けるばかりであり夜はそのベンチの下に潜り込んで休んだ。若し疲勞の色を見せるや忽に監督者が鞭打されたこの奴隸の苦役の間ノツクスは一度も失望落膽の色を見せなかつたと云ふ。やがてノツクスは英蘭政府の干渉によつて苦役から免れ英蘭に歸ることを許された。然し蘇國に歸ることは許されなかつた英蘭にあつては五ヶ年間説教を続け、また大陸に於ける英人に道を説いた。當時は、エドワード六世の治世であつて國王は新教徒であつた。國民の大半は猶羅馬教に屬して居たので、ノツクスの如き人物を必要とした。ノツクスはバーウィック・オン・ツワイド(Berwick-on-Tweed)の町でニッカースル(Newcastle)市や倫敦その他の都市に於て説教した。而して説教する毎に多くの聴衆を集め得た。其名英國内に喧傳され到る處で新教の撰手として視られた。遂に僧正に任ぜんとまで云はれたが、辭して受けなかつた。當時有名な大僧正クランヤ(Cranmer)さへも新教英國の祈禱書の文句に就いてノツクスに相談しその意見を採用した程であつた。

英蘭の新教は次代のメリ・チュドア(Mary Tudor)の治世に至つて逆轉し英國は國を擧げて舊教國となつた。その爲めに多くの新教徒は他國に避難所を求めた。ノツクスも亦新教

徒にとつて大陸に於ける唯一の避難所である。セネヴァ(Geneva)に難を避けた。セネヴァに當時同じく宗教改革の首唱者の一人であつたジョン・カルヴィン(John Calvin)が居つた。カルヴィンはノツクスと殆ど同年輩であるが、蘇國の新教説教者よりも遙に博學であり、凡ゆる種類の人間を意の如くに動かす力をもつて居た。ノツクスはカルヴィンに接して得る處が多くあつた。ノツクスが後年蘇國に於てなした教會建設や僧侶、長老、牧師補佐及び集會等の規定はカルヴィンに學び得たのであると云はれて居る。

やがてノツクスはフランクフルト・オン・ザ・マイン(Frankfort-on-the-main)の集つてある英國新教徒の避難者の集會を司る牧師たるべく招かれて行つた。然るに是等の亡命者は同じく新教徒ではあるが、常に彼等の間に爭論が絶えなかつた。彼等がなした爭議の論點は英國の祈禱書中に書かれてある諸點に就いてであつた。彼等の論争は史上でフランクフルト・トラブルズ(Frankfort Troubles)と稱せらるるものであつて、これが英國宗教史及び延いては英國文學史上に重大なる意義を有するものである。この際ノツクスが支持した主義が後年に至つて清教主義(Puritanism)となり、その清教主義が産んだ結果としては米國の文明の建設者たる所謂ピルグリム・ファザズ(Pilgrim Fathers)の渡米となり、英本國にてはクロムウェル(Cromwell)を産み、詩人ミルトン(Milton)があらはれ、天路歷程(Pilgrim Progress)の著者ジョン・バンヤン(John Bunyan)の出現となつた。此處に至つてノッ

クスは文學史上に至大の關係を有するのであり、ノツクスの家を訪ねた理由があるのである。ノツクスはフランクフオーに留ること六ヶ月にして、集會の人々にも自身にも何等益することなきを悟り再セネヅアに立ち歸り其處の英人新教信者の集りに牧師の役をつとめた。セネヅアにては人々が互に

爭論することもなく和合の一家族を作り、共同の惱み共通の希望と信仰とによつて互に結束した。セネヅアに五ヶ年間滞留した間に一ヶ年間ばかり蘇國に立ち歸ることを得、故國の布教に望を抱くやうになつた。

講話

岩石學用顯微鏡の使用法(三)

小 川 琢 治

三、薄片の製作法

顯微鏡で鑛物を検査するにはその薄片を造ることが先づ問題となる。ソアビー Socby が初めて硅化木の組織を見る爲めに造つたのは今から丁度百年以前で、鑛物の薄片の方は遙かに後れて一八五〇年に試みられ、岩石研究の開路者となつた。但し之より先きに方解石結晶の方柱を斜截して再び之を膠着した偏光器を創製するに當り、キリアム・ニコルがカナダ・バルサムの膠着の適劑たることを發見したので、薄片の製作が可能となつたのである。

ソアビー氏以來製作法は發達したが、その要領は極めて簡單で、之に要する材料も亦た左まで多くない。即ち荒すり用の方一尺許の鑄鐵板二枚、方六寸の厚硝子板一枚、カーボランダム磨砂二種